

ヴァッサー大学日本語夏期研修： 交流を通じた異文化理解

ドラーヂ 土屋浩美

私が教鞭をとっているヴァッサー大学は学生数約2400名のリベラルアーツカレッジである。学生には一年間の外国語履修が義務付けられており、現在約90名の学生が日本語を学習している。国際交流基金の2007—2008年の調査によると、近年北米では「アニメやゲームなどを通じて……日本語学習に興味を持つ学生が増加傾向にある」。目覚ましい日本のサブカルチャーのグローバル化の中で、雑誌、インターネット、テレビなどのメディアを通じて頻繁に得られる「日本」の情報により、日本という国はアメリカ人にとってますます身近になってきているようだ。

日本文化がグローバル化したことは喜ばしい。しかし問題点も垣間見られる。メディアを通じて得られた文化が実際にどれだけ真実の姿を反映しているのかは疑問である。日本というものが、サブカルチャーという媒体を通じた「仮想文化」でしか理解されず、学生が誤った情報やイメージを持つのではないかといった懸念もある。グローバル化が進む中、日本語教育、そして日本文化教育のありかたを改めて見直す必要性を感じている。語学教育における文化理解の必然性と指導方法については近年指摘されている問題のひとつである。学習者のサブカルチャーへの興味を維持させながらも、どのようにそのイメージと現実との差異に気づかせるか、そして異文化を学習者独自の視点で見させることができるかが重要な課題であると考えている。今回の発表では本学の夏期研修を紹介すると共に、研修において文化をどのように取り入れているかを説明し、さらに今後の改善に繋げる意味での考察も加えてみたい。

1996年に発足した全米外国語教育協会（ACTFL: American Council on the Teaching of Foreign Languages）の外国語教育の目指すべき目標には、語学面だけでなく文化面も重要な教育の柱として掲げられている：Communication（コミュニケーション）、Culture（文化）、Connection（つながり）、Comparison（比較）、Community（コミュニティ）。これらは5Cと呼ばれている。このように90年代後半から、北米でも文化教育に意識が向けられるようになって来た。

北米で使用される教科書にはしばしば、お辞儀のしかた、挨拶の仕方、相槌の打ち方、遠慮、謙遜など事細かに、「日本人らしい振る舞い」「日本人らしさ」の規範が説明されることが多い。しかし、佐藤慎司（2007）も指摘しているように、実際のコミュニケーションにおいては、「年齢、性別、社会的地位など、人のバックグラウンドに関する情報、そして、実際にその言語を使用する状況によってかなりのバリエーションが存在」する。規範の知識を土台に、さらに学習者個人個人が「日本人らしさ」のバリエーションが学べるように、教師はどのような環境作りを心掛けたらよいのだろうか。21世紀に入り、技術などの発達により、世界がますます近くなり、情報も簡単に手に入るようになった。文化を学ぶ環境作りも工夫によっては実現できるのではないだろうか。文化を知識として教えるということはもはや最小限にして、その知識をベースに、むしろいろいろな形で個々のコミュニケーションを促す方法に力を入れ、考えていくことが大切だと感じている。

一年もしくは半年留学という形で日本に行き、文化の中で学ぶことがもちろん望ましい。しかし、実際に留学を実現できる学生はほんの一部で、本学でも年間10名に満たないほどである。日本への留学に興味があっても、専攻や副専攻の必修科目の都合で断念せざる終えないケースが多いようだ。そのような学生への留学のオプションとなるように、我々は日本における日本語夏期研修を2006年より立ち上げた。初年は10名の参加者であったが、3年目に当たる2008年にはほぼ倍の18名に膨れ上がり、いまや本学でも人気のプログラムとなった。それと同時に日本語学習継続者の割合も急増し、このような変化に伴い、我々教師陣も本学での日本語プログラムのあり方の見直しが必要であることを痛感している。

研修は協定校でもあるお茶の水女子大学で8週間に亘り実施される。日本語初級レベルを終了した学生が、一年分に当たる2年生の日本語（一日3時間、総時間数120時間）を集中的に学習する。講師は、お茶の水女子大で日本語教育を専門的に研究されている先生方を斡旋していただいている。教科書はALCから

出版されている『初級実践日本語』Vol.2、3（日暮嘉子著）を使用。ここで習得した単位は正規の単位としてみなされ、学生は、新学期からはその上のレベルである中級日本語（3年生）のクラスに入ることができる。

本研修の特徴は、Summer Language and Culture Programというタイトルが示すように、語学研修にとどまらず、文化研修をも含む点である。2回のフィールドトリップがあり、東京の主要な観光スポット、そして京都にも足を伸ばす。また講談社、集英社などの出版社を見学する機会も過去にいただいた。茶道、箏曲、弓道、合気道、日本舞踊、書道などのクラブにも体験入学し伝統文化を学び、またさらに、英語、生活科学、グローバル文化学環の授業にも定期的に参加し、日本人学生との交流を持つ。グローバル文化学環の学生とは共同研究プロジェクト（授業のタイトルは多文化交流実習）を行い、両大学が授業の一環としてカリキュラムに組み込み、ヴァッサーでもそれは研修の評価の一部としている。

多文化交流実習のシラバスには次のようにプロジェクトの目標が明示されている。

- ・ To obtain appropriate and deeper information about Japan. (正確に深く日本に関する知識を得る)
- ・ To obtain intercultural communication skill through practical work with Japanese students. (日本人学生との共同作業を通して異文化コミュニケーションの技術を得る)
- ・ To improve your Japanese. (日本語を上達させる)

日本人学生とアメリカ人学生がトピックを通して、コミュニケーションをもち、議論・比較し、また、アンケートや調査などの活動を通し、学外にまで出て行き、日本人学生の助けを得ながら、地域社会にまで行動を広げていく。これはまさに先ほど挙げたACTFLの5Cを網羅する形となっている。

ここで共同プロジェクトの内容をさらに詳しく説明し、その成果を分析してみましょう。プロジェクトトピックは、ヴァッサーの学生一人一人があらかじめ研修前に決めることになっている。以下は2008年のトピックの例である。

- 「女性らしさの日米比較」
- 「ヒップホップの日米比較」
- 「武道の日米比較」
- 「アメリカと日本のマクドナルドの違い」

- 「イディオムの比較」
- 「若年層の価値観の変化」
- 「女性と職場」
- 「日本のお笑いとアメリカのコメディ」
- 「ストリートパフォーマンス」
- 「漫画とコミック」
- 「教育の日米比較」

伝統文化から、ヒップホップ、ストリートパフォーマンス、漫画などのサブカルチャーまでトピックは実にさまざまである。ヴァッサーの学生一人に対し2、3人のお茶の水の学生が加わり、日本語と英語の両方を使用して研究を行う。8週間の研修中、隔週で3回授業があり、学生は合同で授業を受け、プロジェクトの進め方を講師である小柳志津先生の指導のもとに学ぶ。学生は授業外で少なくとも毎週一回は会い、プロジェクトを進める。調査方法はグループによって異なるが、例えばストリートパフォーマンスのトピックを選んだ学生は、上野に行き実際にストリートパフォーマンスを見、パフォーマーたちにインタビューをしたようである。日本とアメリカの学生の違いを研究したグループは、アンケートシートを作成しクラスの学生に記入してもらい、それを比較し分析したようだ。学生たちは自分たちの選んだテーマをメンバーと共に、外国語というツールを用い、考え、比較しあうことでお互いの文化を学び、さらには異文化コミュニケーションの技術をも習得する。

最後の4回目の授業ではいよいよプロジェクトの発表となる。各グループ20分程度の時間が割り当てられ、学生たちはパワーポイントやビデオなどを使い発表する。発表では、ヴァッサーの学生は日本語を、お茶の水女子大の学生は英語を使う。発表を通して、学生は各自選んだ文化トピックのエキスパートになれるだけでなく、他のグループの発表を聞くことで、文化の視野を広めることもできる。さらに共同作業や意見交換を通して、個々それぞれが「異文化」を感じ取り、内面化することができる。この協定校同士で手作りで作り上げる共同授業、共同研究は、総合的な異文化理解に大いに役立っているといえるだろう。

2008年と2006年の研修後のアンケートによると全員が、共同プロジェクトは非常に役に立ったと答えている。次のようなコメントも見られる。

- ・ It helped create friendships which led to cultural knowledge (友情を築くことができ、それは文化理解につながった)

- ・ I learned the difference between how Japanese students and American students view around themselves (日本人学生とアメリカ人学生のもの見方の違いを学んだ)
- ・ Understood knowledge of culture (文化の知識を得た)
- ・ Learned what it is like to work with Japanese students; because I had to spend more time with my group members in this class than any of the other classes (日本人学生と研究するのはどのようなかんじか分かった。このプロジェクトメンバーとは一緒に過ごす時間が一番多かった)

共同プロジェクトは、語学習得というよりも文化習得に効果があったと学生は考えていることが伺える。また、グループの学生との密接な繋がりにより、文化の違いも実感したようだ。つまり、彼らは個々の観点で、個々の「気づき」により日本文化を理解したようだ。

「気づき」をさらに明確化するため、2008年度に参加した学生の中から、6名を選びインタビューを行った。(この6名は大学に入ってから日本語を始めた学生で、日本に行った経験がなかった)。彼らが抱いていた日本のイメージと日本語学習動機は、いかに研修後変化したかを調べてみた。(表1)

1. 研修前の日本語学習動機

この発表のはじめに、国際交流基金の報告を紹介し、北米の学習者の最近の傾向としてサブカルチャーへの興味があると述べた。しかし、それだけが唯一の学習動機ではないようだ。動機としてサブカルチャーをあげた学生は、B(ヒップホップ・エレクトロニック音楽)のみであった。DEFは、将来ビジネスに生かしたいという学習動機を述べている。また、BCFは英語に近い言語でないもの、比較的難しい言語を習いたかったという理由で日本語を選んでいる。日本語を技術としてとらえ、将来のために活用したいという学生が(この調査においては)比較的多かった。

2. 研修前の日本のイメージ

どの学生も日本に行く前にはステレオタイプの印象しかもっていなかったようだ。日本人に関しては、「丁寧、プロ意識がある、きちりしている、シャイ」といったイメージ、また、日本に関しては、ネオンサインにあふれている都会のイメージ、またはその対極の美しい伝統といったイメージが挙げられた。それらの

イメージはアメリカのテレビ、インターネットなどから発信されるイメージでもある。面白い表現としてBの学生が、日本は「おとぎの国のように楽しそうだった。好奇の目で日本人をみていた」と答えており、彼が日本をファンタジーの対象、「異質な他者」と捕らえていたかがわかる。

3. 研修後のイメージの変化

ABCDEFははっきりとイメージが変化したと回答しており、BCFは、日本は全くの異文化ではなく自分たちの文化とそれほど変わらないと感じたようだ。日本を「おとぎの国」として見るのではなく、先入観のない公正な目で観察し、その上で相異を発見したようだ。

4. 現在の興味

日本語を学習する動機にも変化が見られた。DEFの学生は研修前には、日本語を将来の就職のためだけに役に立つという動機を持っていたが、しかし、研修後にはほかの理由も加わった。Eは、国際経営のために日本語を学習したいと研修前は述べており、興味の対象はどちらかという都心だったが、今ではむしろ田舎に関心があると答えている。ビジネスの世界はアメリカも日本もあまり変わらないと気づいたからだそうだ。Fは、はじめはあまり日本文化に強い関心がなかったようだ。しかし、今は翻訳家になることを希望しており、日本文化の深いところまで理解し、微妙なニュアンスまで上手に訳せるようになりたいと答えている。

以上、学生たちは「個人として接すること」により、教科書で学んだ文化から飛躍して異文化を体験した。学生Bは、研修後のインタビューは「改めて自分の体験を振り返る上で役に立った」とコメントしている。彼らの学習した異文化は目で見えるものではない。感覚であり、インタビューなどによる内省がなければ、それはなかなか意識化されない。

研修を通して学生は異文化を情報として「教育」されるのではなく、自らが理解し「学習」した。我々教師たちの今後の課題は、研修後どのように異文化理解というテーマを持続させ、フォローアップしていくかということである。研修を一過性のものとして終わることなく、帰国後も授業に継続させなければならないだろう。今後は、わたしたち教師陣もグローバルに視野を広げ、遠隔技術などのテクノロジーを積極的に日本語の授業に導入し、海を隔てていても距離を感じさせないような交流環境を作っていく必要があると感じ

表 1

研修前	学生 A	学生 B	学生 C
1. 日本語学習の動機	Some of my family members in Taiwan know Japanese, so I wanted to study Japanese. (台湾の親戚が日本語を話すので日本語を学ぼうと思った。)	I needed a language requirement. I wanted to do something...a skill that many people don't have. It was a choice between Japanese and Arabic. I was also interested in music- Japanese hip hop and electronic music. (語学の必須として日本語を選んだ。多くの人にはない語学技術がほしかった。日本語かアラビア語どちらを選ぶか迷った。日本のヒップホップやエレクトロニック音楽にも興味があった。)	I studied Latin a few years. I wanted to learn something I can speak and (which was) also challenging I was interested in Japanese music and art like super flat. (高校でラテン語を勉強した。大学では話せる言語を勉強したかった。そしてチャレンジしたかった。)
2. 日本のイメージ	I used to watch Japanese shows on TV. I thought Japanese people are proud of their own culture..... The international image of Japan was incredible to me. Western culture is powerful. Western power is spread around the world as the best thing. But Japan is one of the exceptions. They like western culture a lot, but they never sacrifice their own culture. (日本のテレビをよく見ていた。日本人は自分たちの文化に誇りを持っているとおもった。日本は国際的なイメージがある。西洋の影響力は各国で見られる。しかし日本は西洋を受け入れながらも、自分たちの文化を捨てることはしない。)	Japanese people are structured and professional. They also have a quirky side. (日本人はきっちりしていて、プロ意識がある。でも面白い面も持っている。)	Stereotypical view. I used to think that they are very different. They are all shy, I guess. (ステレオタイプイメージのイメージをもっていた。日本人は自分たちと違う。シャイだとおもっていた。)
研修後			
3. イメージの変化	I learned Japanese lifestyle from commuting to shopping. It is a little different from the image I had. It is true that Japan has really high tech buildings, but there are suburbs and stuff like that. Learned different life style. (日本人の生活を学んだ。すこし抱いていたイメージと違う。ハイテクな建物があるのは事実だ。でも都心を離れると違うライフスタイルもある。)	Image about Japan has changed. Now it's more human in my mind than a spectacle to look at. Before it was a weird fairly land, fun to look at. They are real people with real problems. (イメージは変わった。以前より近く感じる。以前は珍しさ、好奇の目で日本人をみていた。日本はおとぎの国のように楽しそうだった。でも日本に住んでいる人たちは自分たちと同じような問題を抱えている。)	Image is different now. I saw things that I thought strange before, but we actually do here. (イメージは変わった。不思議だ思っていたことが、自国でもあることに気づいた。)
4. 現在の興味	While we were in Japan, we had cultural workshops. I really liked them. Tea ceremony, I like it a lot. I want to venture out (and learn about the) traditional cultural aspect. (文化について学ぶ機会があった。茶道がすきた。今度は伝統的な文化を学びたい。)	Mostly about people. Meeting new people. Try to be able to have fun and have experience with people I have never met before. (This interview) helped me understand the experience I had. (もっと日本人と知り合いになりたい。このインタビューは自分の経験を振り返る上で役にたった。)	Interested in Eastern philosophy; I study western philosophy exclusively. I want to even see how Japanese talk about western philosophy. (東洋哲学に興味がある。今西洋哲学を中心に勉強している。日本人が西洋哲学についてどのように考えているか知りたい。)

研修前	学生D	学生E	学生F
1. 日本語学習 の動機	Modern culture was interesting to me. Related to my major, economics. I was interested in the Japanese business world and its interconnection with the western world. (現代文化に興味があった。専攻が経済学なので、日本のビジネスの世界、とくに欧米世界とのつながりに興味があった。)	International business. I wanted to do business. (国際経営のため。ビジネスに生かしたかった。)	I wanted to study Arabic or Japanese. I am interested in business application in using Japanese. Not necessary a cultural thing. (アラビア語か日本語がまず勉強したかった。ビジネスに日本語を役立たせたかった。文化への興味というわけではなかった。)
2. 日本のイ メージ	I did not know much about Japan. Image I had is that people are polite and the place is clean. I learned about Japan on TV, internet (日本についてあまり知識がなかった。日本人は丁寧できれいな好きだと聞いていた。テレビ、インターネットなどで日本のことについて学んだ。)	(I had the) image that people are polite. People have a weird image of Tokyo, and at the same time (it has a) beautiful traditional culture. Also, business like Sony - international business (日本人は丁寧なイメージがあった。日本は変わっていて、でもその反面、美しい日本文化もある。またソニーなどのイメージが強かった。)	I thought that everything's got to be grey, crowded, and it is going to be confusing, everything and everywhere with neon, but it was not like that. I thought they are super polite and they will hate me because I am American (which was not true). (すべてがグレーでごみごみしているかと思っていて。すべてが混乱していてネオンサインばかりだと思っていたが、行ってみると違っていた。日本人は丁寧だというイメージを持っていた。そしてアメリカ人が嫌いなんじゃないかと心配していた。)
研修後			
3. イメージの 変化	I am not sure if my image has changed. They are still hardworking. Yet on the weekend they are relaxed; they are just good balanced. (イメージが変わったかどうかは分からない。日本人は以前と同じでまじめに働くイメージがある。でも週末にはリラックスもするのをした。バランスがとれている。)	I still think everybody is incredibly polite. At the same time, college students are college students; they do the same as American students. (今でも日本人はとても丁寧だと思う。でも同時に大学生は自分たちとあまり変わらないと気づいた。)	Definitely (my) image has changed. The train was crowded but funny. Every morning I had a good laugh about it. It was amusing. People were very friendly. Even business men were friendly; they taught us how to read restaurant menus. I thought Japanese had negative view toward Americans. I assumed that they are angry about Americans because of Iraq, etc. I did not see any of that. (イメージは変わった。確かに電車などごみごみしているが、面白かった。毎朝大学に通うのが楽しかった。日本人はとてもフレンドリーで、サラリーマンですら親切でメニューの見方を教えてくれた。日本人はアメリカ人に対してマイナスイメージを持っている、イラクなどのことがあり、怒っているかと思っていたが、そのような印象を全く受けなかった。)
4. 現在の興味	Through talking to strangers, I got really practiced in Japanese and learned about culture - just talking in general. I want to go back to get a job and go to business school there. (見知らぬ人と話し、日本語と文化について勉強した。日本にまた行って、仕事をしたい。そしてビジネススクールに行きたい。) I want to learn arts, traditional arts. I want to know how they are related to modern culture. I want to visit many places, learn about the music scene in Japan, and also about traditional music. (また伝統芸術もまなびたい。伝統がどう現代文化とつながっているか知りたい。またいろいろなところについて、伝統的なものを含め音楽についても学びたい。)	Rural areas. I want to stay in a legitimate inn, a ryokan in Kyoto instead of the city. Business was not as different as I expected. I had a discussion with a man from Wisconsin about how it is like working in Japan. I feel like I already learned it. (田舎に興味がある。京都などの古い旅館に泊まりたい。ビジネスはそんなに思ったほどアメリカと変わらなかった。日本でウィスコンシン出身のアメリカ人に会い、日本で働くことについて話す機会があった。もうそれで十分だ。)	I am interested in (becoming a) translator as a future career. It is important to have cultural knowledge. There are cultural gaps I want to go back to and understand. I want to do academic translation. When I wanted to know about foxen (in folktales), I could not find any translated books on foxen. (翻訳家になりたい。そのためには文化の知識が必要だ。日本とアメリカには文化のギャップがある。そのことを次回日本に行くときに学びたい。アカデミックな翻訳に興味がある。以前、きつねについて知りたいかと思ったが、[おとぎ話の] 狐について訳された本が無かった。)

ている。

今回は夏期プログラムの内容紹介という形で報告させていただいた。学生の異文化理解の深さはどの程度のものであったのか、また、比較を通して学んだ異文化理解は果たして正確なものであったのだろうか（新たなステレオタイプを生み出す危険性はないのだろうか）といった問題点は未解決のままである。さらなる検証が必要であり、これらの点については、今後の課題としたい。

参考文献

- 木谷直之・前田綱紀（2005）「外国人日本語教師と高校生ボランティアの協働による素材収集型交流活動の意義：高校生ボランティアの気づきに注目して」『日本語教育紀要』2号、31-47.
- 佐藤慎司（2007）「『日本人のコミュニケーションスタイル』観とその教育の再考：アメリカの日本語教科書を例として」『WEB版リテラシーズ』第4巻1号、1-9.

- 星野浩子（1995）「インターアクションを起こさせる試み：オレゴン・早稲田夏期プログラムでの実践を通して」『講座日本語教育』30、168-181.
- 細川英雄（2004）「『社会文化能力』から『文化リテラシーへ』」『第一回リテラシーズ研究会』14-20.
- 牧野誠一（2003）「文化能力基準作成は可能か」『日本語教育』118号、1-16.
- 「日本語教育国別情報〈米国〉」（2007-8）国際交流基金
<http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/country/2007-2008/usa.html>
- 内藤満、有馬淳一、木田真理、築島史恵「衛星通信による日本事情の遠隔授業の試み」『日本語国際センター紀要』第12号、143-148.

ドラージ つちやひろみ／ヴァッサー大学